

# Computer Report

Vol. 56 No. 1 1月号 (通巻 736号)

## 謹賀新年

■世界規模すなわちグローバルに捉えると、人類の人口は増加の一途である。しかしヨーロッパをはじめとする先進諸国の人口は減少している。その意味で日本も先進国としての傾向を立派に示している。何をもちて先進国とするかだが、一応、経済活動力を基準にした場合の先進諸国には今、自国民の再生産能力すなわち子孫を繁栄／増殖させていく能力が失われてきていると指摘できよう。盛者必衰、実者必虚のことわりをすら感じる。

■国家の再生産能力減衰の意味には、ただ単に絶対的人口数（頭数）の減少というだけでなく、様々な能力を身につけた人材の育成能力も含まれる。世界にあつての日本だが、その日本国をグローバルとする位置付けで考えると、そこには日本国家を構成するリージョナルな政府、地方自治体、企業組織、各種研究機関、学校など様々な組織が在る。そしてローカル／パーソナルな家庭／家族という家組織／個人が在る。

■極端な人口減少傾向を見せている日本は、国家（グローバル）レベル、国家を形成する各種構成組織（リージョナル）レベル、そして個別の家庭／個人（ローカル／パーソナル）レベルにおいても、次代を担う後進の再生産能力／育成能力が激減していることを実感できる。要するに、日本を構成する全ての要素レベルで、目先の現状を守るだけの姿勢が顕著に見える。世界全体の動きと相対して衰退の流れにあることは否めない。

■そもそも、先進国だといったところで経済的な富みで押し量った場合が多い。曰く「衣食足りて礼節を知る」ではないが、問題はその後である。今日本は、国家の品質品格をさらに上のレベル／尺度で押し量るべき段階にあると考えたい。たとえば高齢化社会にあつて高齢者の生活品質（QOL）向上を高めようという動きがある。しかし QOL 向上は、決して高齢者世代に限るべきでない。あらゆる世代の全国民が対象とされるべきものである。

■実に様々な世代が存在するのが国家である。文字通り次代を担う学業世代を養育していきながら、高齢者も介護していく。ただ高齢者介護を個別家庭の力だけでなく、社会レベルの力で果たそうとする試みの中にある。それは、国家国民の生計を維持している勤労世代には、勤労活動に専念してもらうためだという認識である。口先だけの「介護離職ゼロ」のリップサービスではなく、本物の社会レベルでの福祉充実が求められている。

■日本の都市部郊外には、多くの集合住宅団地が存在している。そこには、多くの高齢者世代が居住している。かつて日本の大経済成長時代を担ってきた戦士たちであり、その配偶者たちである。しかし、彼らが育て上げたはずの子供世代との同居例はほとんどない。子供世代も、かつての親世代同様、生活報酬確保のための勤労活動に専念しているからだ。この現実の有り様は、様々な社会問題を提起しているように思える。

■日本全体として見た場合、この間の世代別生活様式は、経済的品質向上にも、生産性向上にも、世界競争力確保にも大いに寄与してきたと言っておこう。しかし少子高齢化時代に入り、経済的／生産的活動の第一線を離れた世代の QOL 向上を高めようとする中で、日本は大きな根元的なテーマに直面していることを実感する。これまでの国家スキームの見直しも必要だろう。新年が読者諸賢にとって、より良い年でありますように。（藤見）